

## 岡山県農林水産総合センター畜産研究所試験研究課題評価票（概要）

### ＜事前評価＞

評価基準 5：優先的に実施することが適当  
 4：実施することが適当  
 3：計画等を改善して実施することが適当  
 2：実施の必要性が低い  
 1：計画等を見直して再評価を受けることが必要

課題名	四つ☆子牛育成技術の確立				
総合評価	4. 0				
	5： 1人	4： 5人	3： 1人	2： 一人	1： 一人
助言・指摘事項等	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. それぞれの要因がどのような寄与で効果をもたらすのか、留意して試験を実施する必要がある。</li> <li>2. 岡山県産の子牛価格の底上げに期待が持てる技術となる可能性が高い。</li> <li>3. 繁殖経営類型別に新飼養方法をセットしたビジネスモデルを想定しておき、適用条件も考慮しておく必要がある。</li> <li>4. 県内飼料メーカーと連携して、コスト面も含めた県内流通体制を検討する必要がある。</li> <li>5. 岡山和牛子牛のバラツキが育成技術によるものなのか、種雄牛が多すぎることに起因するものなのか検討も必要である。</li> <li>6. 飼養管理のし易さや、枝肉成績とリンクさせ、総合的な四つ星子牛の評価情報を活用してほしい。</li> <li>7. 強化哺育の技術は、系統飼料により確立されており、四つ星適用率UPにはマニュアルによる普及啓発が重要と考える。</li> <li>8. 課題としては、初乳代用乳→ミルク→代用乳ペレット⇒スターター⇒TMRのうちスターターの部分の技術的な開発が遅れていることが考えられる。</li> </ol>				

課題名	高機能性飼料の利用による飼料価値向上技術の開発				
総合評価	3. 9				
	5： 2人	4： 3人	3： 1人	2： 1人	1： 一人
助言・指摘事項等	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生産性を上げることが一番重要なので、生産性があがれば添加効果があるといえる。添加して消化率が上がったことをいうには、消化試験で確認すれば確実。採食量が変わらずに生産性があがれば、間接的に消化率があがったことが推測される</li> <li>2. 機能性と生産性向上が結び付かない場合もあり、機能性にこだわるより、新しい飼料資源の開発に絞り込んだ方が良いと思われる。</li> <li>3. 世界の穀物市場などの動きをみれば、飼料自給率の向上は必須課題であり、本課題は重要。</li> <li>4. 稲WC Sでは、食込量と消化性の問題が現在でも残されているように思えるので、「おいしい」餌づくりと可消化性の向上の視点も留意して欲しい。</li> <li>5. 食品残さ、未利用資源の利用価値の基本は安全性はむろんの事、安定確保、流通、コストの適正化にあり、TMR組成を考える上で十分に考慮しておいてほしい。</li> <li>6. 機能性を有する可能性がある資源の検索の基準が曖昧であり、成果は期待できそうにない。</li> <li>7. 平成18年から22年で同様の試験が行われているにもかかわらず試験結果の総括がないまま、同様のテーマで3年間取り組まれていることに疑問を感じる。</li> <li>8. 負のエネルギーバランスは乾乳期、育成後期の飼養管理の影響が大きい。牛特有の消化器における作用については、安易に考えないほうがよい。</li> </ol>				

課題名	高泌乳牛の超省力管理システムの開発				
総合評価	4. 0				
	5 : 一人	4 : 7人	3 : 一人	2 : 一人	1 : 一人
助言・指摘事項等	<p>1. 酪農では規模拡大が必要であり、今後、搾乳ロボットシステムの導入もそのための一つの手段と考えられる。</p> <p>2. 単に設計施工上の問題に終わらせずに、搾乳ロボットを核にした酪農経営全体の経営改善に結びつけて検討し、汎用性を持った西南暖地向けのマニュアルを期待したい。</p> <p>3. 搾乳ロボットシステムの導入は、搾乳の時間が減少するのでその分、飼料生産の拡大が期待できる。</p> <p>4. 省力化と飼養管理の精密化は時代の流れであり、県の研究機関としても先を見越して取り組んでおく必要があり、効率的な試験研究推進上も重要と思われる。</p> <p>5. 既導入の経営を十分に調査し、改善すべき点をさらに明確にして、重点的に研究を進める必要があり、民間企業等との連携による研究も考える必要がある。</p> <p>6. 搾乳ロボットの経済性の調査が重要であり、キャリロボとの比較研究は将来の本県酪農経営に有益である。</p> <p>7. 繋ぎ牛舎の家族経営の現実を見直し、新たな視点から将来的な「日本型」酪農経営の有り方を模索する事は重要と考える。</p> <p>8. システム化・機械化は、必ずしも魅力ある酪農経営に直結しない。経営主のマネジメントはむろんであるが、基本的に牛を観察できる自らが手をかける日常性が大事であると思う。</p>				

課題名	近赤外線分光法等を用いた堆肥の迅速診断法の確立				
総合評価	4. 6				
	5 : 4人	4 : 3人	3 : 一人	2 : 一人	1 : 一人
助言・指摘事項等	<p>1. 堆肥のNIR分析が他府県の機関でも行われているようであれば、相互に情報交換することにより研究の進行が早まる事が期待される。</p> <p>2. 診断体制が確立された後も、何らかの予算を配してそれを維持することが必要と思われる。潜在的ニーズが大きいと思われるので、耕畜連携が進むよう上手くPRしていただきたい。</p> <p>3. これまでの研究蓄積の上に立ち、堆肥の場内循環利用の促進、畜産経営の収益向上に大きく貢献することが期待されるので、可能な限り短期間で成果を上げていただきたい。</p> <p>4. 対象作物や土地利用法によって、分析項目や許容精度差があっても良いと思われるので、用途目的に対応した簡便化と短縮法も検討してほしい。</p> <p>5. 施設設計とどの程度精密に関連づけられているかわからないが、利用者の知りたい最終情報は「いつ、どれくらいの量」であるので、将来的には普及センターの協力も得て、経験値をデータベース化して、利用者とのインターフェイス改善も課題になると思われる。</p> <p>6. 今まで以上に、耕種農家、特に特色ある園芸農家への普及によって生産コスト低減に役立つと期待できる。</p> <p>7. 畜産農家で製造される堆肥の基本的な分析と、耕種園芸農家に対する適正な利用促進の手段にしてほしい。</p> <p>8. 堆肥利用の拡大に障害となっている“コスト高・利用の不便性”などへの対策が遅れている。</p>				

岡山県農林水産総合センター畜産研究所試験研究課題評価票（概要）

< 中間評価 >

評価基準      5：優先的に継続することが適当                      4：継続することが適当  
                   3：計画変更して継続することが適当                2：継続の必要性が低い  
                   1：中止すべきである

課題名	バイオマスを活用した効率的エネルギー回収技術の研究				
総合評価	4. 4				
	5： 3人	4： 4人	3： 一人	2： 一人	1： 一人
助言・指摘事項等	<p>1. 試験の意義および技術的水準は着実に高まっており、継続して知見の充実を図っていただきたい。</p> <p>2. わが国では、特に重要な課題であり、県としても取り組む必要があると思う。この分野は日進月歩で技術が進展しており、ややもすると、研究機関中にも新技術が生まれ、技術の陳腐化と新たな展開が生まれる可能性も高い分野である。2年程度の限られた期間では課題限定と達成目標をできるだけ具体的に絞り込んだものにしておかないとエンドレスになりやすいので、留意する必要がある。</p> <p>3. 岡山大学との共同研究にみられるように、大学等のシーズ的な研究と組み合わせて、県がその実用性をチェックし大学等にフィールドバックすることは、研究の効率性からみても望ましいと思われるので、今後とも、このスタイルで拡大・継続して行ってほしい。</p> <p>4. 本題も含めてより先端的な研究で近未来に重要と思われる研究に対しては、新技術導入に関する県の知的能力水準や知的財産を将来の子孫に残していく上でも、必要な施設整備を図り、要員を確保して継続的に試験研究を存続させる必要がある。</p> <p>5. 初期投資額、ランニングコストとエネルギー回収効率を考慮すると、バイオマスを導入する経済性が見えない。このことが実証展示効果が見られない要因である。エネルギーの回収効率を高める技術の検討を行っているが、低コストで実用性の高い技術の開発を期待したい。</p> <p>6. 民間会社との連携もすすめてほしい。</p> <p>7. 研究課題を総じて今一度、現場における研究対象の必要性を農家へのアンケート等で集約してはどうか。特段に専門性の高い研究より、現場で最も必要とし広く実用可能な研究課題を設定していただきたい。</p>				